

第6回 ご縁ありて いま

奥嶋佛心（名田庄井上、曹源寺住職）

2007年6月14日

「ご縁ありて いま」

早川 みなさん今晚は。それでは時間になりましたので、第六回名田庄多聞の会をただ今より開催いたします。今日は井上（いがみ）の曹源寺のご住職の奥嶋佛心さんよりお話を伺いします。タイトルはここに書いてあるとおりです。多聞の会に初めてお越しの方も多いようなので、この会について簡単に説明します。

この会は、普通の講演会とか勉強会とかとはちょっと趣向が異なっています。最初一時間ほどお話を聞いた後、同じくらいかそれ以上かけて質問やら感想やらいろんなことを話し合うというやり方になっています。どうか講演後もここに残っていただいても聞いていただきたいと思えます。それでは奥嶋さま、どうかよろしくお願いたします。

奥嶋 皆様今晚は。井上の曹源寺の奥嶋佛心です。この多聞の会を私知りませんでして、今日初めてお伺いさせていただきました。お話をしてくれということでも来ましたが、どちらかというとロケたで、話はいつも法事の時の話もしどろもどろでやっています。檀家の皆様にはこちらの気持ちも伝わらずに、何を言っているのか分からないような話ばかりして申し訳なく思っています。そういうわけで話はヘタでまとまった話は出来ないと思えますが。

「ここに掲げました」「ご縁ありて いま」、縁あってこのような出家の姿

をさせてもらっているという、そこまでのことをお話します。気楽に引き受けたのですが、いつも五、六人ということだったので、そのくらいならいいかと思つてまいりましたら、案内人が多くて(笑)、皆様のご期待に添えないかも知れませんが、自分の話を中心にさせていただけようかなと思つています。

海苔農家に生まれて

私は東京の大田区大森の生まれでして、昭和二十五年、一九五〇年の生まれです。大森という所は昔は浅草海苔の本場だったので。私の実家も海苔を作っていました、代々海苔生産農家(農家というのでしょうか)でした。海苔というのは大変な仕事で、真冬の仕事なんです。冬東京湾に、だいたい羽田沖ですが、そこに竹の支柱を立てて網に海苔の種をまいて海苔を養殖し、それを取つて来るのですが、真冬の仕事なので、海に出て取つてくるのがとても冷たい仕事です。今は、有明海でやっているのを見ていると、海の中にバキュームを突っ込んで吸い上げていますが、冬船を出してそれはとても冷たい仕事でした。そして、夜中の十二時頃に起きて、取つてきた海苔を砕いてミンチのような機械に入れて、粉々にして大きな樽のようなものに砕いたものを入れて混ぜる。そして、三合くらい入る升のようなものに取り出しては、それを竹の簾が曳いてある木の枠に流し込んで一丈分ずつ作っていく。私はまだ小学校のころですが、その作業が夜中の十二時頃から始まるのです。父や母や

おじいさんが夜中に起き出して仕事をする。朝方までかかつて一つずつ作っていく。干す道具があつてそれにかけていくのですが、晴れると外に干し場があつてそこに出す。夕方になるとそれらを取り込む。そして、一枚ずつはがしていく。そうして一枚の海苔ができるのですが、そういう仕事をいつも見ている、海苔の仕事はイヤだなと思ひながら、だんだん大きくなっていきました。

東京オリンピックの頃、一九六四年ですか、私が中学一年か二年の頃でしたが、その頃、東京の様子が一変するのですね。首都高速道路が出来てモノレールが出来る。羽田から都心に向かう高速道路やモノレールが出来るといふことで東京湾を埋め立てることになり、海苔の生産が出来なくなりました。大森には相当の数の海苔農家がありました。けれど、すべての人が東京都や国から補償金をもらつて廃業しました。私の家は海苔をやめて勤め人になりました。そんなわけで、私は海苔農家を嗣ぐことはなくなつたのですが、親の期待としては、大学を出てサラリーマンになつてもらいたいという気持ちだつたと思うのです。私の小学校、中学校時分の希望は、商社マンになつて世界中を回ることにした。旅行が好きで世界中を回るのが夢でした。

それが高校になると、世の中、学生運動が非常に盛ん時代になってきました。高校二年や三年の時に東大や日大、すべての大学で学生が騒いでいましたですね。世の中が騒然とした時代でした。ベトナムではアメリカの介入により戦争が行われていました。ベ平連というのがありました。ベトナムに平和を市民連合、市民団体です。お茶の水に事務所が

ありました。そこを訪ね、このくらいのパッチがあるのですが、そこに「殺すな」と書いてあり、それ胸につけて、それだけなんです。そのパッチをつけているだけでみんなにじろじろ見られ、あんまり見られるので恥ずかしいので取ってしまいました。

学生運動まではやりませんでした。反戦運動のようなものにはちよつと首を突っ込んだりしました。主にベ平連関係でしたが、都心にデモに行ったりしました。霞ヶ関や文部省やアメリカ大使館に、大きな道一杯に手をつないで、ジョン・バイズのウィ・シヤル・オーバカムなど歌ってデモをしたりしました。いわゆる全学連の人たちがするような、ヘルメットをかぶって角棒をもってジグザグにデモをするようなことは、私の性格上出来ませんでした。

高校二年、三年、周りの人は大学受験に入っていくのですが、私自身はその受験ということに集中できず、政治的なことや自分自身の将来をどうやったらいいのか、どう生きていくのかということがまず頭にあつて、大学を出たあとサラリーマンになって社会の歯車の一つになることが、どうしても納得いかずに行きました。受験勉強も身に入らず、大学は一応受けたのですが案の定ちゃんと落ちまして、浪人するようなことになるのです。

家を出て一人で暮らす

浪人生活もしておったのですが、将来自分がどう生きるのかという

ことを考えると、大学に入つてサラリーマンになるというそっちの方向には、どうしても人生を描くことは出来なかった。そこで、このまま家におつて親の庇護を受けているのは、親の意見も聞かなければならないし、このままでは自分の自立というものが出来ないと、浪人中に家を出ました。東京の中目黒で新聞配達を始めたのです。新聞配達をしながら予備校に通っていました。昼間予備校に行つて、朝と夕方新聞配達をする、そういう奨学生のような制度がありました。

予備校に通いながら新聞配達を半年ほどしましたが、新聞は朝日新聞で週刊誌も配るのですが、たまたま週刊誌を見ながら配っていたら、その中に「キブツ協会」の記事が出ていたのです。キブツというのは、イスラエルにある農業の共同体ですが、キブツの思想を紹介し、日本からの研修生を斡旋する、そういう組織（キブツ協会）が東京の赤坂にあると書いてありました。その記事を見て非常に興味がわきました。そして、その前に、たまたま、ある本屋さんに行きましたところ、『百姓志願』という本があったのです。薄い本ですが、著者は岡田米雄さん。元高校教師で、高校の教師を辞めて埼玉の鶴ヶ島という所で酪農を始められたのです。その経緯が本の中に詳しく書いてあるのです。その本の中で非常に印象に残ったのは、「農作物を商品にしてはいけない」と書いてあったことです。今でこそ産直、生産者から消費者に直接渡すということが言われて行われていますが、その本はそのしりのころのことですね。岡田米雄さんという方は、農作物を商品にすることによって、野菜や果物をきれいに作らなければならなくなる、今売っている果物

にしても宝石みたいな果物ですね。傷があつてはならない、虫が付いたりしたら全然売れないわけです。商品にするとそうなるてしまう。作っている農作物を直接理解してくれて、それでもいいという人に直接買ってもらう、そういう生産者と消費者が直接結びついた、そういうことをしていかなければいけないのだと、岡田さんという方が言っておられました。

もう一つ、共同体ということをお田さんは言っておられました。共同体で一つの団体を作つていっしょに消費者と直接結びついていく、そういう運動をされようとしておられた方の本を読んで、感激いたしました。岡田米雄さんに手紙を書いてお会いしたいということをお申し上げましたら、岡田さんが「自分の意見に賛同している若い人が東京にいますからその人の所に行つてください」といわれた。岡田さんの信奉者で、まだ農業はしていないけれど勉強会をしている人が何人かいます。私はそこに新聞配達しながら通つたりして、勉強会に参加したりしていました。そういう時にキブツ協会の記事を見たわけです。

赤坂のキブツ協会を訪ねました。小さな事務所でしたが、そこに二人事務の方がいらつして、色々話をしてる内に、その事務の方が、北海道に山岸会というのがあつて北海道試験場という所で「北海道通信」というミニコミ誌を出していると言つて、それを見せていただきました。学生運動の盛んなときだったので、そういう所に若い人が結構行つていたのですね。その人達を中心になつてミニコミ誌を作つていたのです。それを読みましたら、記事が非常にいきいきと書いてあるのですね。仕事

のありよう、生活のよろこびのよいようなことが書いてありました。それを読んで非常に感激してぜひ行つてみたいと思つたようになりました。そして一九歳の秋、新聞配達もやめて予備校もやめて行く決心をしました。

北海道へ

北海道へ行くということは、言つてみれば自分自身の将来を決めるということですから、大学をやめて、親のもと東京を離れ、北海道のそれこそ道東ですから、釧路からもう少し知床の方に行くところでありましたが、根釧パイロットファーム、昔は別海村、今は別海町に変わりましたが、小高い所を登ると向こうに国後島が見える、そんな所でした。夜になると、昔のソ連領ですね、サーチライトがパツと走るのでね。そのような日本の外れのような所に行つたわけです。

行く前、ちょうどそのころはフォークソングがはやつていた頃で、ここ名田庄にも受験生ブルースの方(高石ともや)がいましたですね、その他いろんな方がいましたが、そのうちのひとつにフォーククルセーダーズというグループがあつて、フォーククルセーダーズの歌に「青年は荒野を目指す」というのがありました。五木寛之という有名な作家が作詞して、曲はフォーククルセーダーズの誰かが作つたのですが、ちよつと歌いますけれど、「一人でいくんだ、幸せに背を向けて、さーらーば、ふうるうさーとーよ、思いでーの山よ川よ、いまあー、うんうん、青春の川を越え、青年は、青年は、荒野をを目指す。もうすぐ夜明けだ、出発の時がきたー、さ

ーらーばー、恋いひとよー、なーつかしい、父よ母よ、いまあー、うんうん、青春の川を越え、青年は、荒野を目指す。(奥嶋さんの歌う歌)」、そんな歌ですけど、聞いて感激しましたですね。その歌を何度も何度も歌いながら、自分の気持ちを確かめて、自分はこちの方向で行くんだと。いわゆる、親の望む方向でない方向に自分は行くと、その歌を歌いながら、確かめながら、それでいいんだと、思い定めて東京を後にして北海道に行きました。

北海道も札幌や釧路あたりまではにぎやかな所でありませけれど、行った所は、ただ牧草地だけある、まったくの田舎でした。私が行きました北海道試験場という所は、成牛、大きな牛が百頭ぐらい、小牛も入れると二百頭ぐらい。農地が二百町、そういう大きな共同体だったわけですね。その頃アルバイトして貯めたお金、五万円か六万円を持って行ったのですが、行って自分の持っているお金は全部差し出して、ここでは生活費はかからない、その代わり給料はない、そういう所でした。自分の必要なもの、下着でもなんでも、言えなくださる、食べる心配はないですけど、その代わり月給は一切ありませんでした。

牛の世話係・アイスクリーム

そこで私の配属されたのは、牛舎、牛の世話係ですね。朝五時ごろに起きて搾乳が始まります。今は、パイプでずつーとタンクに行くようになっていますが、昔は一頭二頭、ミルクカーというバケツのようなもの

に入れて、そして乳缶というアルミの大きな三五キロほど入る入れ物に一頭ずつ搾っては空けていきます。それが一杯になったら水のある大きなプールの様な所で冷やす。百頭ぐらいは居る大きな牛舎がありました。それを半分に分けて二人で端から順に搾っていく、それが五時頃から始まって六時、七時とかかるんですね。片方三五キロ、両方で七十キロの缶を持って運ぶのです。長い牛舎を急ぎ足で運ぶようなことで、だいぶ身体を鍛えられました。それが終わると糞出し、やはり牛は身体が大きいので、糞も相当するんですね。夜中たまっていたのを一輪車に乗せて運んで行く。夏の場合は牛を外に出しますが、冬の場合はサイレージ、発酵させた飼料に干し草を混ぜて与える。

ひと仕事終わるのが十時くらいですかね、十時になると一服する。搾り立ての牛乳を鍋で沸かして、食堂の係の人が簡単なパンのようなものを作ってくださるので、それを食べる。ホットケーキのようなもので、あんなにふつくらとしてなくて、昔の小麦粉で焼いた、ドツタラ焼きというのか、油で焼いたものです。乳缶が三、四十本あるのですが、搾乳は朝と夕方とします。牛乳というのは脂肪分が上に浮いてくるのですね、乳缶を振っていると脂肪分が固まってきたり丸い粒の脂肪が出てくる。それを取り出してヘラのようなもので水分を出して、そして塩を混ぜて自家製のバターを作る。十時のおやつにきた。パンのようなものに自家製のバターをどつさり塗って、塗るのでなくて乗せる、パンと同じくらいの厚さに乗せて食べておりました。牛乳も搾り立てだから非常においしいです。バターもおいしさが違うんですね。本当のおいしい

ものは、売っているものとは違うなという感じでした。

そこで私の一番感心したのはアイスクリームですね。筒状のものに乳脂肪を入れてそのまわりに氷を入れて冷やしながらかき回して、砂糖を加えて作るのですが、そのアイスクリームが本当においしいかったですね。新宿の西口にあるデパートにいつも行列の出来るソフトクリーム店があると新聞で見に行きまして、並んでそのソフトクリームを食べましたが、いつも自分達が北海道で食べていたアイスクリームと比べて、糊を食べているような気がしました。それくらい違った。みなさんがおいしいおいしいと言って食べているのはこの程度なのか、といった感じですね(笑)。本物とイミテーション(模造品)との違いですね。どんなにおいしいと言っているても、商品として売っているものはいろんなものを加えていますから、添加物の所を見るといろんなものが書いてありますけれど、そうやって作ったもののおいしさというものと、本当のクリームと純粋なもので作ったもののおいしさというものの違いが、その時しみじみと分かりました。牛乳とバターとアイスクリームは本当においしかったですね。

北海道から四国へ

北海道の試験場には三年間いました。十九、二十、二十一と。三年目の時にここにたまたま来ていた私と同じくらいの歳の若い人が、政治運動でなくて農業の方に関心を持っていた若い人が何人もいまして、そ

の中の一人が福岡正信先生の『緑の哲学』という本を持って来ていたんですね。その本の表紙からして衝撃的な表紙(カバー)だったのです。それはなだらかなミカン山の写真なのですけれど、地面はクローバで被われていて、ミカンの木があつて、その前にお坊さんのような歳を取られた方がミカンを手を持って、そのわきにヤギがいて、そのヤギの口の所にミカンを持っていつている。そんな写真でした。地面のクローバがあまりにも美しくきれいに撮られていて、非常に感心いたしました。本を読んで、福岡正信という方が「自然農法」ということをやっておられることを知りました。福岡先生の所にぜひ行ってみたいという思いに駆られ、北海道に三年いて、北海道から福岡先生の所に行くことにしました。

北海道にいた時は五、六万円持っていました。それはすべて出していたので、そのとき無一文でした。そのとき中にいる若い人がかわいそうに思つて、二千元カンパしてくれました(笑)。その二千元をもつて北海道からヒッチハイクで東京までまいりました。国道ぶちで手を挙げて、そんなのは若い時だからできるので、今の私ならできませんけれど、お金がないので必死なのです。道路に出て、こつやつて手を挙げて、なんとしても車を止めなければならぬ。函館まで三台か四台の車に乗せてもらつて、函館のフェリー乗り場で下ろされて、そこで何台もトラックが泊まつていたので、「東京まで行く人はいませんか」と。たまたま乗せてくれるトラックがありましたので、函館から東京の平和島というトラックのターミナルまでは一回で済みました。そうやって帰つてまいりました。

山岸会の研鑽学級

北海道におりました時の話は、さっきの食べ物の話と、それと山岸会。山岸会には研鑽学級というのがありまして、二十人くらいの方が車座になって、一週間、二週間と研修会をされるんですね。初めて受けました研鑽学校という所で、一週間びつしりと、朝から晩まで進行係の人を中心にいろんな討論をするんですね。その中で二日目か三日目かに、「今ここで死ねますか」というテーマが出たんですね。私と六十歳くらいの人以上は、研鑽学級を何度も受けていた人たちだったので、そういう人たちは皆さん、「はい、死ねます」とこう言うのです。一人ずつ順番に回っていくとそう言う。私と初めて受けた六十歳の人、相沢さんは、「やー、死ねません」と。私も二十歳になるかならないくらいで、今ここで死ねますかと言われてはい死ねますと、とてもじゃないが言えない。ですけど、なぜ死ねないのですか、と係の人が言うてくるのですね。私の隣にいた相沢さんという人は、「戦争に行つて命のない所をくぐつてきた、命が惜しいとは思わないが、今死ねますかとここで聞かれて、はい死ねますとは言えない」、そういつておられました。私もまだ夢も希望もあるような時でありましたから、とてもじゃないがここで死ねるとは言えない。

しかし、それで終わらないのですね。なぜ死ねないのか、どうして死ねないのか、それをずつと何度も何度も問いかけてくるわけです。そ

れに対して自分自身でいい訳をするわけですね、なぜ死ねないのかと。それが丸一日過ぎててもまだ終わらない。翌日お昼ごろですけれど、こちらの方もいい訳も根も尽き果てて、自分自身も追い込まれて、自身自身の今までの人生が走馬燈のように出てくるんですね。そして最後は、死ねないという気持ちは変わらないのですね、ですけど口先だけでもいいから、死ねると言つてやろうと思ひまして、そして最後はどうとう、「はい、死ねます」と言つたのです。

そうしましたらこれまた不思議なことに、それまで自分で死ねないとずつと思つていた、それを口だけでも死ねると言つてやろうと思つて、言つた途端、今まで胸の中で死ねないという思いがころつと変わつて、死ねるになつたのです。これはまた不思議な感じでしたが、それまで他の方々が、「死ねる、死ねる」と言つてのを、そりゃウソでしょうという気持ちもあつたのですね。しかし、自分が死ねますと口で言つたときに、心の中までがらつと死ねるに変わつてしまつたときに、皆さん「死ねる」といつてることが、ああそうなのかと分かつたのですね。そして、そのときにつくづく思つたのは、分かつたのは、今ここで死ねるということは今ここを一生懸命生きるということであると。それが分かつた。今ここを一生懸命生きる、全力を尽くして生きる、そのことが今死ねるといふことなのだ。

まあ、それは、皆さんなかなか分かりにくいことかも知れませんが、禅の方で後から知るわけですけど、「死にきつてみれば誠に楽がある。死なぬ者には真似もなるまい」という、昔の有名な方の歌があるのです

けれど。死ぬ覚悟、その覚悟が本当に出来たときは、今、一生懸命生きるのだというそのことが、腹の底から、ぐっと生きる意欲がわいてくる、それが事実でありますね。そういう一つの経験を積まさせてもらった、そのことと食べ物のおいしかったこと、その二つが北海道での試験場でのいい経験でありました。そして、愛媛県の伊予市に福岡正信という先生がおられた、その方の所に訪ねて行ったのであります。

福岡正信先生の自然農園

まったく連絡もなにもせず突然行って、ぜひ置いていただきたい。その当時『緑の哲学』という本の中に、先生の元に若い人たちが何人か、山小屋といいましようか、自然農園という所に共同生活をしていると書いてありましたので、そのことを知っていましたので、その仲間に入れてもらおうと行ったわけです。

そうしましたら、まあ、そういうことなら、山に行つて一晩、二晩泊まってみなさいと言われ、山小屋に案内していただきました。伊予市は松山から四、五十分の所で、伊予市から福岡先生の所は車で十五分くらいです。福岡先生のお家から歩いて十五分行きますと、田圃の平たい所から山に入る、そういう所の堂ヶ谷という所に、先生の持つておられるミカン山がありまして、その中に小屋がいくつかあったわけなんです。その中のひとつが「小心庵」、そして「無想庵」、「狐狸庵」、私が行った時には三つありました。

その自然農園には、入り口の所に木の板の看板がありまして、自然農園と筆で書いてありまして、その下に「哲学農園」と小さめの字で書いてありました。その木の看板が枝の所に掛かっているのですね。そこからだんだん上り坂になって、それをしばらく行くと、なにも舗装もしていない道ですが、車が一台通れるほどの幅で両脇に雑木、ナラかクルミの木の標識のようなものがあって、その片側を削って、そこに「大道無門(だいどうむもん)」と書いてある、そしてこちら側に「千差路有(せんしやみちあり)」と書いてありました。「大道無門、千差路有」、大きな道には門がない、真理を尋ねる道は千のさまざまな道がある、けれど、その入り口はないのだと。大道とは真理に至る道であります。「大道無門、千差路有」、それが門の様な形で道の両側に書いてあった。

もうしばらく行きますと同じように、「汝自身を知れ」と書いてある。ソクラテスの有名な言葉ですね。もう少し行きますと、「人智は洞窟の智」、智慧でもいわゆる分別智ですね、ああでもない、こうでもない。二つ、男・女、あるいは昼・夜。人間は二つ分けて考えますね、その人智は洞窟の智だ、洞窟の智とは真つ暗ということ。そしてもう少しばら行くつて、ちよつと見晴らしのいい所まで行きますと、「大地に広狭無し 碧空に遅速無し」と書いてありました。大地に広狭無し、そこから見える大きな伊予平野、田圃なんかが見えるわけですが、広い、狭いは我々の頭の中の世界の話で、早い、遅いも我々の頭の中の話で、この自然界はそういうことは一切関係ないのだと。

もうしばらく行くと、「小心庵」という小屋がある。そこは行ってみ

れば昔の作業小屋のような所で、その小屋の標識には、「我ここに無音の鐘を撞く」と書いてありました。音のない鐘を撞く、自分がここに自然農園をつくったのは、世の中に音のない鐘を撞く、そういう心意気、それで自分はここに自然農園を開設している。小心庵の中は八畳くらいに土間がついているような所でありまして、八畳の真ん中に一つ囲炉裏があつて、土間は四畳くらいあつたですかね、奥の方にかまどが一つ、手前側に、入った所に、大きな瓶がありました。そこに水がためてあつた。その脇に戸板が一つ置いてあつた。それで調理するのです。まな板と包丁があつてそこで調理する。かまどに火をくべながらご飯をそこで作る。おかずもみそ汁もそこで作る。私の行った時も十人くらい人がいましたが、若い同じような世代の人ですね、やはり、一つの時代だったのですね。道を求める人が何人かおりました。

もうしばらくミカン園の中を行くと、「一木一草の心、即神」。そういうことが書いてありました。一木一草、一本の木、一本の草、それらは神だ。そういうふうな道標と言いましょいか、先生の言葉であつたり、あるいはソクラテスの言葉であつたりするのですが。自然農園、哲学農園の精神、どういうことでの農園がなっているか、出来ているか、そういうことがよく分かる言葉がいくつもあつたのです。

自然農園での生活

そこで生活が始まったわけですが、電気もガスも水道もない

まತ್ತたくの山小屋ですね。人家は十五分も歩けば行けるところでありまして、行ってみれば山の中でありまして。下からは五十メートルくらいの高さの所です。水は下から汲んできて、ちよろちよろ出ている水を汲んで、瓶にあげる。往復百メートルくらい行ったり来たりして水を調達する。

そして、夜はローソクですね。かまどで玄米ご飯を炊く、そこらの野菜を取ってきて調理して食べる。まあ、十人くらいがいつものですけど、月に二万円、先生からもらうのですね。そのお金でローソクや食事のための油などを買ったり、小麦を買ったり。十人の人がそれだけで生活するのですから、なかなかいたしたものです。行った時はお風呂もなかったですね。ちよつと下りた所に大きな池があつて、そこでみんな裸になってじゃぼじゃぼ洗っておりましたけれど、後から木のお風呂を買ってくださいました。下屋の隣に簡単なお風呂場が出来ました。お風呂のある時は本当に極楽のような気分でありましたですね。電気もガスも水道もない、そういう生活を私自身は三年ほどしておつたのです。

日常的には田圃やミカン園のお手伝いをいたしました。その作業を通して、あるいは一休みの時に、福岡正信先生のお教えを受けるわけです。野外授業みたいなものですね。いろんなお話を聞きながら勉強していくわけでありまして。

ある時、ちよつと一休みしている時に、目の前に大根が一本あつたのです。先生が言われるには、「この大根の価値が本当に分かったら世

の中ひっくり返るぞ」と。そのようなことをおっしゃられた。私がまだおりました時に、この『わら一本の革命』という本を出されたのでありますけれど、この中に写真があつて、その中に若い頃の私がいるのです、まだ髪を伸ばして。そこに二十二歳から二十五歳までいました。

ひと月に一度、みんなで松山まで行くのですね、十人くらいの団体で。必要なもの、ローソク買つたり油買つたり小麦粉買つたり。最後に道後温泉に入つて帰ってくるのですね。それが楽しみでした。外から見たら山小屋の山乞食がいるような感じだったのでしよう、多分。薄汚れた洗濯なんでもそんなに出来ませんよね。冬の洗濯はつらくてようやりませんでしたね。洗濯機でないので手があまりにも冷たくて。たらいに固形の石鹼をつけてごしごしやるのですが、あまりにも手が冷たくて出来ないのですね。お風呂焚いた時はそのお湯を使つて洗濯もしましたけれど。

その生活の中で一番印象に残っていることがあります。近くで養鶏をやつているおうちがありまして、いわゆるゲージ飼いですね、金網が何段にもなつていて、そこに鶏がいて、エサを与えられて卵を産む、そんなゲージ飼いをしている所があつたのです。ゲージ飼いをしているとどうしても、産卵といつて卵を産まなくなつた、産めなくなつた鶏が出てくるのです。そのような鶏は羽根も抜けて、白色レグホンでしたが色も茶色になつたような、薄汚い感じになつて、首も傾けて、生気のない鶏なのですが、その鶏をもらつてくるのです。

山小屋の「小心庵」の隣に小さな鶏小屋を作り、二、三羽もらつてき

てはそこで飼うのです。初めは全然動かないのでけれど、玄米の古米やクズのような米をあげて飼っているとだんだん元気になって来て、そうなる外に出てきてついでに草を食べたりミミズを食べたりしていく内に、ひと月ふた月すると、死にかつたような黄ばんだ白色レグホンがそれこそ、真っ白な素晴らしい鶏に変わるのです。そして、五十メートルくらいばーっと飛ぶんですね(会場、小さなざわめき)。それにはびっくりしました。死にかつたような白色レグホンが見事に復活するのです。その鶏が卵を産むのですが、その卵の黄身は赤いような黄身が盛り上がつて白身の所も盛り上がつたような、爪楊枝をいくらかさしても崩れないような、そんな卵を産んでくれるのですね。自然の力というか、素晴らしいと思ひましたですね。

しかし、残念なことに、鶏の放し飼いというのは野犬にやられてしまうのです。鉄砲撃ちの人が猟犬を連れてまいりますね、その猟犬に追いかけて回されて殺されてしまうのですね。鶏も何度も何度もやられてしまつて、最後にはだめでしたけれど。ちゃんと囲いをすれば何とかなかつたかも知れませんが、そういうことがありました。

鶏は何でも食べるのですね。私どものおりました「小心庵」からちよつと離れた所にお便所があつたのですけれど、お便所の中まで鶏が来るのです。私ら玄米を食べていたので、どうしても不消化のものが出てくるのです、それを一生懸命食べてくれるのです。出来た卵を私どもが食べるのです(笑)。ちゃんとうまくできていました(笑)。循環しております。

そんな生活をしておりました時に、珍しいということでもNHKやテレビが取材に来るんですね。四国の珍しいことをしている若い人の集まりが松山であり、テレビの収録があり、出たこともありました。ある時NHKのプロデューサーが、「青年の主張」がマンネリになっている、ボランティアだとかお巡りさんだとか看護婦さんだとか、言ってみれば、品行方正な人たちが出てきて一生懸命自分はどうやっていきます、とかしやべるので、ずっと同じような調子でつまらなくなっている、私どもの小屋に来て誰か出てくれないかと。他の人たちはそんなのはイヤだと断っていました、私だけ原稿用紙四枚、自分の思いを書いていただきました。そうしたら、四国の愛媛県で二百くらい応募があったのですが、そのうちの第一次予選十人の中に入りまして、十人が松山の愛媛大会に出ることになりました。私は初めは原稿用紙を見ながらしやべっていたのですね、ラジオ放送だったのです。四国四県あるうち、各県で二人ずつ四国大会に出られるのですが、私が男の方の一人になりまして、愛媛県の代表になっちゃった。もう一人の女の方は保育園の先生でその方もいい話をしてられました。

松山での四国大会はテレビ放送で、五分間主張するのですが、ちょっとでも時間オーバーすると失格なんですね。そこまで行くと、原稿も覚えて演壇に立ってしやべっているわけでありますが、四国大会で優勝すると全国大会で東京に出られるんですね。東京のNHKホールで全国放送となり、ヨーロッパ旅行がお土産に付くのです。しかし、残念ながら私は二番目でした。トロフィーと賞状はもらいましたが全国大会ま

では行かなかった。その時に、自然農園での生活やそこにおることの思いを青年の主張でしやべったわけでありますけれど、その時は新幹線などくそ食らえ、などと言っていました、プロデューサーの方から、そういうことは言っちゃいけないと言われまして、そこはカットしてしやべったりました。

小浜の仏国寺へ

そんなんで福岡先生の所に三年間いました。そこを出てお寺に入つて、昭和五十二年の二月か三月に小浜市の仏国寺にリュック一つ背負つて行きました。その前までおったお寺さんに紹介状を書いてもらつて、それを差し上げて、入門をお願いしました。そうしたら、仏国寺の和尚さんが許してくださいまして、その日の夜、夜坐のとき、「朋有り遠方より来たる、また楽しからずや」、そう言つて下さった。「朋有り遠方より来たる、また楽しからずや」、そのお言葉をいただいて、修行が始まったわけでありまして。六月の十日に得度することになりました。

自分の今までの、北海道に行つたり、あるいは愛媛県の自然農園に行つたり、そういう自分なりの歩みをしてきて、出家する、坊さんになるということとは、自分自身にとっては自然な道だったのです。坊さんになるときに特別な動機とか何かきっかけがあつて坊さんになつたのではないです。他の人はわりとそういうことを言われるのですが、自分の中では一つの自然の流れとしてお坊さんになることになったわけです。

まあ、自分自身の資質といましようか、性格といましようか。昔、四柱推命という占いをする方がおられて、私でなくて私を知っている方が私の生年月日を出して、その方に見てもらったことがあった。そうしましたら、私は宗教家か芸術家になる、晩年がいいと書いてあった。五十七歳から十年間が人生のピークだと書いてあった(笑)。ちようど今五十七です。

自分の性格や、高校ごろから自分の関心のあったことが、こちらの方向だったのだなあ、と今思えば思うわけであります。高校生の時に、NHKの大晦日の番組の「行く年来る年」というのがありますが、そこで永平寺が出たんですね。永平寺の大梵鐘を撞いて一回「ことにお拝するのですが、それを見たときに、敬虔な姿、合掌して一つ撞く毎に頭を地面につけてお拜いしている、その姿になんとも言えぬ静かな敬虔な姿を感じたんですね。そこで「広辞苑」で永平寺を調べて、永平寺に手紙を出して、「坐禅さしてください」と高校の時に出したのです。そうしたら、たまたまそのときは吉祥閣という大きな建物の建設中であつたので、現在、参禅は受け付けておりません、と断りの葉書をいただきました。高校の時もそういう宗教的なものに関する思いはあつたですね。

またあるときは、「アサヒグラフ」という写真の雑誌がありました、その中に函館のトラピスト修道院というのが出ていまして、その中に一人の年老いた修道士、六十歳くらいの方でしたらうか、その方の修行している写真が載っております。夕方、畑仕事が終わつて鍬を自分の前

において、夕方の鐘の音を聞きながら頭を下げています。お祈りしている姿が写真に出ていた。フランスのミレーという画家の晩鐘という絵がありますね、あれは農夫でしたけれど、その修道士の姿にも非常に感動して、後にそのトラピスト修道院を訪ねたことがあります。結局、キリスト教の方はあんまり縁がなかつたですけれど、禅宗の方には縁がありました。このように僧、お坊さんをしております。ちよつと時間がオーバーしましたので、はしよつたのですが、これで終わります。

早川 どうもありがとうございます。

講演後の質疑応答

早川 それではこれから後半の部に入りたいと思います。いろいろお聞きしたいことがあると思いますのでどなたでも。なにか質問ありませんか。

参加者A その前にお茶なんですけれど、これは奥嶋さんの手作りのお茶です。持ってきて下さったものです、うまく入っていないかも知れませんが。

奥嶋 私も本格的ではありませんが、これは、熊本の菊池市の山奥の「聖護寺(しょうごじ)」におりました時に、一年間おつたのですが、そこに堂守のおばあさんがおりました、そのおばあさんが手作りのお茶を作つておられたんですね、その方に習ったのです。それから先ほど回したのは、これは山椒の葉の佃煮なんですけれど、これもそこで習ったの

です。醤油とみりんだけで炊き込んで作るのです。身近な所にある物で手作り、自分でいうのも何ですが、自分で作るのが大好きで作って食べています。山椒の葉っぱはどこでもありますから、やろうと思えばできるのですから、よかつたら作ってみてください。

お坊さんになる

早川 お聞きしたいのですが、北海道での話や四国での話はとてもおもしろかったです。福岡さんの自然農園からお坊さんになるまでがあつという間にすんだので、そのところを聞かせてもらえませんか。

奥嶋 時間がなく簡単に話しましたが、福岡先生の所で二十五歳まで学んだのです。一つはですね、私がおりました時に、十人くらいの人が入れ替わり立ち替わりいました、ずっと長くいる人はあまりいなくて。ある時などは私一人を残して全部出したりしたんですね。私、結構期待されていたんです、福岡先生の後継者として。

しかし、福岡先生の言っておられる自然農法は非常に難しいのです。本の中に書かれていることは、米と麦の連続不耕起栽培ということですね。やることは簡単なんですけれど、それを実際にやってちゃんとした収穫をあげようとする、並の腕ではなかなか出来ないですね。私も三年間おる間に自分で任されたりしてやりましたけれど、田圃でいえば雑草が大変で、水をかけたり抜いたり、クローバーを下に生やす

のですけれど、それがうまくいかなかったり。全然薬は使わないので、畦がモグラでやられちゃうんですね。モグラの穴をつぶして一晩水を貯めようと思つてもつぎの朝行くともう穴が空いて全部抜けていたりした。管理が思うようにいかないんですね。先生の気持ちはありがたいのですが、先生の期待されるようなことはできないなあという感じは正直あつたんですね。それで、二年して一応出ささせていただいて、東京の実家に半年ほどおつてお寺に行つたのです。

一番初めは、熱海の丹那トンネルの反対の函南の長源寺を、福岡先生の所で知り合った人のおじさんが住職だったので、訪ねて坐禅の体験をさせてもらつて、そのお寺に半年ほどいました。そのお寺の住職が小浜の仏国寺の弟子だったので、紹介していただいて小浜まで来ました。そこで本格的な修行をすることになりました。

今回、この会で自分のことを話すというお話をいただいて、自分のことを話す決めてから、インターネットで「福岡正信」で調べたらいろいろ出てくるのですが、その中に京都大学農学部で自然農法研究会というのがあり、その中で福岡先生の所にいた人で、今までの講演や実際のことを知っている人はいませんかというのがあつたのです。三年間もいましたからメールで私の知っていることでよかつたらお教えしますと連絡しました。一週間か二週間前に京都に行った時お会いして二、三時間話してきたんです。その方は福岡先生のことを研究するのをテーマにしておられて、いろんな方から話を聞いたり、あるいは月に一度くらいは愛媛県に行つているのだそうです。いろいろ聞くと福岡先生と関わりあ

る人で自然農法で田圃をやっている人は一人もいないということですが、難しく。確かにそうだなと思うんです。

インターネットを見ている時に、私がいた時と同時期にいた人が二人でできました。一人は原秀雄、その人は奈良県の十津川村、熊野のとなりです、そこに入っておられてカズラや流木をオブジェにした芸術家になっておられました。

もう一人は町田武士、私より少し年下ですが、その人は栃木県の藤岡町、東京から行くと東武線で栃木に入った所に藤岡というのがありますが、もともと農家だった自分の家で有機農法でやっておられる、無農薬で化学肥料を使わないで三十年間やっておられます。福岡先生の所から帰って三十年間自分の所で地道にやっておられたのですね。

町田武士君は「あき津亭」というホームページ(*)を作っています、「あきつ」というのはトンボの古語なんですけれど、無農薬の有機栽培の米と野菜、そして小麦も作っていて、自分の所の小麦で手打ちうどん、いわゆる漂白しない小麦粉でうどんを打って、自分の所でお店をやっておられる。

* <http://www.eco-online.org/ecovillage/>

もうひとつは、「幸せのコットンボール」、日本の在来種の綿を栽培して、それで衣服や綿を作る運動をしている。栃木の一番南ですから、東京からでも一時間もあれば行けますが、今の時代ですから無農薬やそういうものに関心のある人はいっぱいいますから、そうした人をNPOの人とタイアップして、東京からそこまで訪ねてきた人に農作業を

やってもらったり、あるいはお米や麦を食べて交流している。つい最近、町田君が三十年間の歩みを本にして出しています。『やまずめぐる』

町田君が炊事当番の時、一升の玄米を圧力釜で焚くのですね、かまどにすえて下から焚くわけですけど、ぴっちり蓋をしなければいけないのに甘かったのですね、ぼーんと爆発して部屋中玄米だらけに(爆笑)。灰と玄米が降ってきて大騒ぎになったことがあります。どっちかというところと間の抜けた所があるような人でしたが、そういった方がかえっていいのかも知れません。愚直で一生懸命三十年間、無農薬でやるうというような。自分のやっていることを都会の人との交わりの中でやる、そういうことの一つのモデルケースでないかと思えます。

人間と自然

参加者B 今お坊さんになっておられて一番の喜びはなんでしょうか。
奥嶋 自身はこれで一番びったりしているのですね。頭をそって坊さんになっているというのが、自分の中では矛盾なくびったりしているのです。そういう意味では幸せな職務に就いているなと思っています。喜びというのは、勉強している時もそうですし、坐禅している時もそうですし、喜びというのは後からわいてくるので、一生懸命やっているときは何も思わないのだけれど、後から気がつく、ああ今日はよかったなど。そういう感じの連続ですね。

坐禅なんかも一生懸命やっている時は何もそんな思わないのですけ

れど、後から気がつくとかあ充実していたと。

参加者B 人間はストレスがたまるし、どうしようもないときがありま
す。精神的に行き詰まった時、さつき鶏がゲージから放されたら元気
になったというお話がありました。人間も同じように考えていいので
すね。

奥嶋 人間は自然の産物なんです。自然に帰れば本来の自分になれ
る。都会の、自然から隔離したような所にいる人はどうしても病むと
思うんですね。今いろんな問題がありますよね、子ども達の問題から
私の三人の先生、福岡先生と仏国寺の原田湛玄老師と、もう一人和
田重正先生、この三人に影響を受けました。本物の方だと思っているの
ですが、もう亡くなられた方もいらつしやいますが、和田先生がこう言
っておられます。

人間は自然から生まれてきたもので、自然に帰ることによって人間
らしさを取り戻すことが出来る、と。

早川 私、山が好きで、山に行くとき大きな木とか岩とか、谷の水が流
れています。そうすると、ありがとうという気がものすごくするので
す。人と会ってありがとうという気はあまり起らないのですが、山に
入って、木も小さいよりも大きい方に、よりありがとうと思うのです。
よくぞこのような所にいてくれた、という気がするのです。木なんかも
大きければ大きいほどいい、岩もそうです。

先ほど言われた、自然に帰るといふ、その帰るといふことですが、た
まに遊びに行くのはいいけれど、普通の人は日常的に帰ってばかりはい

られない、仕事もあるし。その辺はどういうことなのでしょう。

奥嶋 自然というのはどこでも一杯あるじゃないですか、路傍の草でも
昔、明恵上人という方が道を歩いていた時に、道端の本当に小さな雑
草に花が咲いていた。その花を見て涙を流して、南無不可思議、不可商
量と。弟子の人がなぜ涙を流しておられるのですかと尋ねると、「お前
にはこの一本の草がここにあることの不思議が分からないのか」と言っ
たという。大きな木や大きな岩から受ける、どんとしたものは確かに
あると思うのですが、路傍の一本の草でもこちらが純なものでし
たらちゃんと受け取ることが出来ると思います。

私は車は乗らないのですけれど、よく歩いたり自転車で乗ったりしま
す。車に乗っているとサート過ぎてしまいますよね、何も見えないで
すね。ですけど、歩いたり自転車で乗っていると、自然のそれがすごく
直に分かるのです。歩くとき特にそう思うんです。特別どこか、山のよ
うな所に入らなくても普段の日常の中において自然と接することはい
つでも出来る。

我々坐禅していますけれど、仏教の教えいうものは無我の教えです、
自分自身がないという教え。まあなんでもかんでもそうですけれど、
一生懸命やっている時は、自分を忘れてやっています、自分の好きなこ
とは特にそうです。そういう、一生懸命やって自分自身の存在すら忘
れて、一生懸命やっている時が一番幸せだ。自分の身体でも何も意識
しない時は健康ですね、どつか痛かったり調子が悪い時は、それは病気
なんですね。まあ、それと同じで自分自身を意識しないで一生懸命や

っている時、それがその人にとって一番幸せだ。

マインドコントロール

参加者C これは反論めいた質問になるかも知れませんが、一時悪名高きマインドコントロールということがありましたが、さっきの北海道の話は、ヘタをすると似たようなものでないかという印象を受けたのですが。

奥嶋 そうですね、私の行った山岸会というのも、言われたマインドコントロールまがいのごとで、社会的にずいぶん問題になったのですね。私は行って、有り金全部を出しましたが、人によつては家族全員が入る、そういう人もいるのです。そうすると自分の田畑すべて出すということになって、そして、もしやめる時に、今度は大問題ですよ、その出したものをどうするかで。基本的には山岸側は返さないのでしょうが、それで裁判沙汰になったり、もめたことが過去にあるんですね。いろいろ、山岸会のやりすぎという問題もあるんですね。

先ほどの、ここで死ねますか、という問題でも、山岸会の言っていたのは、無我執・我執がない、無所有、そして一体だということです。それ自体は禅の方でも言いますし、なにも間違はないと思うのですが、それを自分自身が自覚する過程というのが、無理矢理他から責め立てられて自分自身追い込まれてにっちもさっちもいかなくなり、中には自分で納得して入るようになる人もいますが、どうしても無理矢理入ると後でトラブルやもめ事が出て来るのです。

だから、山岸会もマインドコントロール的な所が確かあったのですね。

それで反省する所があつて、無理な指導はしないようになって来ています。一歩間違つたとそういうことになるんですね。そしてまた、山岸会の言っていることが、いわゆる自己否定なんですね。究極は自己否定なんです。昔「浅間山荘事件」というのがありましたが、ああいう事件でも結局は、突き詰めていくと自分かわいさという思いが出てきますが、それを自己否定の論理でやられてしまうと、にっちもさっちもいかなくなって引つ込めざるを得なくなるような、それほど自己否定の論理は強くて、またある意味真実なんです。だからそこを間違つと、ああいうとんでもない、殺してもいいんだというようなことになったりする。禅の方は自分自身が自覚する、仏教は自覚の宗教だと言いますね、自分自身が本当に納得して、そして、そうだと自分自身腹が落ちる、腹落ち、といいましようか、それが出来ていく、その方向に歩んでいく、それが禅の修行です。他から責め立てられて思い込むんじゃないんですね。そこらはちよつと違つので、無理な所と無理をせずになんと一歩一歩歩いていく修行とは違います。

無収入、無一物

山岸会でもそうでしたが、福岡先生の所でも給料はゼロだったのでね。無収でやつておつたのです。お寺というのも基本は無収、収入なしです。ですから私もお坊さんになる時に、最後のお坊さんになるかな

らないかの決めの所は、むかしから有名な言葉で「無一物中無尽蔵、花有り月有り楼台あり」というのがありますが、無一物です。昔で言うのと良寛さまという有名な方がおられますが、良寛さまのように本当に無一物で、自分のものほとんど何も無いような五合庵という貧乏の極みのような所で生活して一生を終わられたのですが、自分自身出家する時に、良寛さまのように無一物の覚悟が出来るかどうかというのが大きな決めというか分かれ道だったのですね。

無一物でいいと自分の中で腹決めできてようやく、お坊さんをお願いしますと私の師匠に頼んだのです。そうしたら、お坊さんになつたら行くとお布施をいただくのです(爆笑)。師匠についてお経を詠むと、小僧さんですけれどちよつと包んで下さるのです。今までは北海道も愛媛県の自然農園も収入ゼロだったのにお坊さんになつて無収入を覚悟したら収入があつた(爆笑)。申し訳ないような話であります。

早川 いろいろ貧乏な話をお聞きしたのですが、空腹で辛いというようなことはなかったのですか。

奥嶋 ああ、それは不思議にないですね。収入がなかったけれどお金で困ったことは一つもなかった。北海道から東京に来る時二千元もらいましたでしょう、ヒッチハイクで交通費はゼロです、途中で食事を一回か二回しましたが、二千元で足りちゃったですね。自分自身お金で困ったことはないのです、本当にありがたいと思います。四柱推命で私は人から恵まれるタイプだと書いてあつたです。

お坊さんになることを出家するといえますね。出家は、家を出ると

書くのですが、だから、私の場合は本当に出家したのは東京から北海道に行く時が自分自身の中では出家だったのですね。お坊さんというのは本来は出家なんですけれど、現在のお坊さんはほとんどが家族持ちなんです。本来からいうと出家でなくて在家なんです。家に在る方が九十九パーセントですね。わずか一パーセントくらいの人が家庭を持たずにお坊さんをやっている。希少価値でありますけれど。ほとんどの人は、皆様と同じように、家庭を持って法事とお葬式を生業としているようなお方がほとんどです。私自身もお布施をいただいているので、自分自身を差し置いてなんですけれど、本来からいうと良寛さまのようなお方がお坊さんであると、自分自身の反省として思っています。

参加者A 出家される時に結婚しないというような、そういう覚悟だったのですか。

奥嶋 そうですね、無一物でいいと思っていましたから、無一物で結婚も何もあつたものでないですね。何もないでいいと覚悟していましたら。

無所有

参加者B 無所有、所有しないという覚悟でといわれましたが、その無所有ということを仏教的にお話ししていただいただけませんか。韓国の女優のイ・ヨンエ(李榮愛)さんのエッセイの中にあつたのですが、「韓国の仏教書を読んでいたら「無所有」という言葉に出会い楽になった」とありました。

奥嶋 無所有、自分のものはないということですね。北海道にいる時に、無所有ということで研修があったのですね。そして私と一緒に受けた人が、その人は私と同じように初めて研修を受ける人だったので腕時計を持っていたのですね、その人が、自分とこの時計とは見えない糸で繋がっている、だから自分のものだとこのことを言うのですね。

意識では自分のものだと思っと思っていますけれど、だけどそれは自分の思いだけの話で、いわゆる観念なんですね。事実は本当は誰のものでもないのでしょうか。今お預かりさせてもらっている、使わせてもらっている、というだけのことなので。自分が亡くなったら遺産分けですわ。仏教は私がないと言っているであって、皆さんは自分があると思っつらつしやるが、仏教の説く所は諸法無我、自分自身さえないと言っている。ただ、因果の道理がある。因果というのは原因があつて結果がある、父母があつて自分が生まれた、そして縁が尽きればやがて死んでいく。そういう、どんどんどんどん一瞬たりともと留まることなく、変わっていく、それが因果の道理です。

その中の、たまたま今のこの時代に自分がこうして生を与えられて、そして今を生きている、そこに自分という塊はないわけです。肉体だつてどんどん変わつていっているでしょう。細胞だつて六十兆ある細胞が一秒間にどんどんどんどん変わりながら身体を保っているわけですね。一秒前の私と一秒後の私とまったく別なわけですけど、表面的には気がつかないけれど、事実はそうです。

参加者B なんかよく分かりません(笑)、だんだんわけが分からなく

なつたのですけれど。私は、本当に持たない状態にだんだんなつていく、そういう生き方。だんだん生きていくと付けていたものを、今だと自分の好みでつけていたものを、一つなくし二つ失くして身を軽くして行く、そういう状態になつていくことなのかなと。

早川 私思うのに、奥嶋和尚は最初から持つておられないから持つている人に説明するのが難しい(笑)。持つておられないから、持つている状態が分からないのでないか(笑)、いや本当に。

奥嶋 確かに自分の荷物というか、そういうすべてものが無ければ無いほど楽ですよ、自分自身が。あつたらあつたで、苦しみのものになる。無一物というのはそこまで徹底したら楽になる。

参加者B でも、しがみつきたいものつてありますね。

奥嶋 ええ、それはあります。

参加者B そういう境地の人にはなれなくて、まだまだしがみつきたい。

奥嶋 そのところは、本当に、自分自身はないんだという所を自分で自覚する、そこまで行かないと本当の解決はできない。

早川 しがみつくのがずっと続くのならずっとしがみついている方がいいと思うのです。しがみつくのは、しがみつく方としがみつかれる方の関係だから、それが永遠に続くという保証があればそうしておれば良いと思う。そんな楽なことはない、しがみついておれば良いのだから。

参加者B そうとは思わない。

奥嶋 気がついていられるでしょう、離せば楽になることを。そうならひ

とつずつ離していけばいい。そして、楽な、本当の自分の安心を。死ぬ時は何も持つていけないですよ。

参加者C もう一つお聞きしたいのです。この間NHKのある番組で非常に衝撃を受けたんですけれど、今でも世界の埋葬の仕方に鳥葬という、鳥が死体を食べるというのがあったのですが、これほど自然な姿はない。今日本は火葬ですね、昔、鳥が食べる、鳥葬はなかったのですか。

奥嶋 日本は昔は土葬ですね。鳥葬はなかったと思います。鳥葬というのはチベットでやっていますね。鳥葬は位の高い人がやる葬儀です。そうですね、もちろん宗教と関係あるので、仏教でもいろいろ分かれてきますけれど、チベットに伝わった教えは、そうやって、肉体を自然界に戻していく、それを鳥に食べさせておこなう。

早川 親鸞の場合は、加茂の川に流して魚につつかればいって言っていますね。鳥葬の魚版。

奥嶋 光明皇后でもそうです、自分が死んだら野に捨ててくれと。

自力と他力

参加者B 博信さんは仏教を勉強しておられるし、あのような本も出しておられるので、佛心さんと共通の所はありますか。

早川 鎌倉仏教に限ってですが、浄土真宗系の仏教と禅宗系の仏教とは違う気がします。それは、本当は違うのはよくないのかも知れないけれど、受け入れる方の資質の違いがあると思います。阿弥陀さまに南

無阿弥陀仏と唱えるのと自分が悟るといふことの違い、極端に言うところ、禅の方に行かれる方は自分一本で立つという感じがする、それがすかつとしている。浄土教の方は、阿弥陀さん頼みます、という(笑)。なんかどろどろのような、大きく分かりやすくいうと、そんな感じがとてもする。奥嶋さんの話を聞いていると、やっぱり、禅宗のお坊さんの一人で立つという、それを感じる。学生ころの話ですけど、金沢は一念仏の宗教なので、「ああ、ナンマイダブ、ナンマイダブ」ととても気持ちよくなっている、おばあちゃん達が(笑)。そういうおばあちゃん達は絶対坐禅はしない、説教を聞いて、「ああ、ありがたい、ありがたい」。そのときは、おばあちゃん悟っているのだと思います。人は資質的に違うから、好きな方を取ればいいと思う。

奥嶋 よく自力と他力というのですけれど、最後の所は一つのものですね。他力の方でも最後は阿弥陀さまにお任せするのでしょうか。そのお任せが普通の人は出来ないんじゃないですか。最後に自分自身を投げ出して阿弥陀さまにお任せする、その最後の一線の所と、禅の方の自力を突き詰めていくと自分自身を投げ出すということになる。やはり一つのものですね。

早川 そこに行く道が違う、最後の所の越えるという所の。

奥嶋 そうですね。千差路有り、いろんな道がある。

参加者D 非常に申し訳ないことを伺うのですけれど、「悟り」ということがわからないのですが、我を捨てるとかいわれることが。禅のお坊さんは修行をして、それで我を捨てることができるのか、非常に興味が

あるのです。僕は少し違う方向で、阿弥陀さまを信じる、あつ信じた、と思つた瞬間、そうでない。

奥嶋 だれでも迷いながら行くんじゃないですか。

参加者D そう言われればもうそうですが。だいたい、皆そう言われるのです。

奥嶋 それしかないと思いますよ。だけど、真理というか、仏様の教えは間違いない、お釈迦様の言っていることは間違いない、真理を言っておられる、そういう、まず確信がありますね。そっちの方向に自分も行くこと。そこに、その坐禅の方向と阿弥陀さまのお慈悲というか、自分を阿弥陀さまと一体化していく、念仏の方向とがある。目標とすべき、我々が行かなくてはならない道はあると思うのです。真理というか、真実というか、そっちの方向に目安をつけて一步一步歩んで行く。その歩む過程においていろいろ迷うこともあるし、自分自身の不甲斐なさに嘆くこともある。泣きたくなるような時もありますけれど。

しかし、例えば、鉄道の一つ列車に乗って、その列車が進んでいく。その進んで行く中で反対方向を歩んでも、列車自体は一つの方向に進んで行くでしょう。それと同じで、自分が反対方向を向いたり、よそ見をしたりしても、いったん列車に乗ってそっちの方向に行こうと思つたら、その列車はその方向にちゃんと進んで行く。仏教を信じて歩んで行くというのはそれと同じだと思えます。歩んでいく過程でいろいろあることは確かに事実であります。私もそうですし、誰もが迷つたり疑問に思つたり、自分自身実行できないと嘆いたり、いろんなことがあると思

うのですけれど、そっちの方向に進もうと心が向いた時、初発心時便成正覚(しょほつしんじ) べんじょうしようがく)と言われますが、初発心とは発心するということ、それはそっちの方向に行きますということ、そっちの方向に行くことを決めたら歩みの方向はいろいろあるけれど、もうそっちの方向に行っているのだということです。初発心時便成正覚。

早川 乗っているのが確信できればいいけれど、乗っているのかなあと疑問になるのが一番の問題点だと思う、これは正しい列車かな、ひよつとして間違つたバスかなと。

坐禅

参加者D 禅の坊さんの修行の仕方がよく分からないのです。どんなレベルに……。

奥嶋 まだ入り口です。

参加者D そんな言うてもらっては困るのです。

(会場から、「ともかく座ってみたら……」)

参加者D 今坐禅できないです。坐禅ね、足がちよつと悪いので。座るといふことですね。

参加者E 日曜日にやっておられるから一度来てください。私らもやつていますから。坐禅して無心になるといふのはなかなか難しいことで、その三十分、一時間の間に、やっぱり私らも坐禅組んでおつて、なんで

こんなときに畑のことが頭に来るのか笑、なんやらせんならんな、とか。これでは修行にやらんといいながら。無心になるといいことは大変なこと。

参加者D それでも坐禅するのですか。

参加者E 一瞬の間でも座らせてもらおうということやね。

奥嶋 坐禅も油断するとよそ見ばかりなんです。曹洞宗では、只管打座(しかんたぎ)、ただひたすら座るといいますが、「ただひたすら」ができないのです。たとえ十年二十年やつても、ただひたすらがなかなか出来ない。私らはそちの方向に行くための杖を使ったりしますが、その杖を使って、自分のさまざま妄想、座つてるとさまざま思いが出てくるのです、それを切り捨てていく。昔の修行は血の涙を流したといいますが、そういう意味では、自分自身の妄想、分別を断ち切ることは容易なことでない。まあ、そういう所から言えば、私らは、まだ初心の初心、入り口の所に立っているだけのはなしであります。

難しいことは難しいけれど、お釈迦様や道元禅師のレベルとは天地ほどの開きがあるけれど、だけど修行しているというその面では平等ですね、一面同じというか。同じに一生懸命道を励んでいます、道元禅師も釈迦様も同じ、一生懸命修行に励んでいます、ということですね。その面では同じ、境界においては差があるにしても。同じ南無阿弥陀仏でも親鸞さまの南無阿弥陀仏と皆様の南無阿弥陀仏とはちよつと違うと思うのです。

三人の師匠

早川 お師匠さんは存命なのですか。福岡さんはお元気なのですか。

奥嶋 福岡先生は大正二年生まれですから、九十二か四歳、お元気です。

早川 仏国寺の方も。

奥嶋 はい、お元気です。

早川 その方々が亡くなられたら、まだ先のことでしょうけれど、何か違うようなことが起こると思われませんか。

奥嶋 違うようなこと？

早川 阿難が、お釈迦様が亡くられる時、亡くならぬでくださいと、嘆いた、すると、お釈迦様は、私は亡くなるけれど教えは残るから泣くな、と。有名な話がありますね。師匠が実際にいる間といなくなつた後とでは違うようになるのでないかというのを思うのですけれど。

奥嶋 やはり心の杖になっていますね。お慕いしている。師匠がお元気であるということだけでも、自分自身の心の中はだいぶ違いますね。もし亡くなられたらなんとも言えないようになるでしょうね、杖とも頼む方ですけれど。

早川 私の師と思つている方が病気になるってほとんど口がきけなくなつて、頭をやられたので寝るばかりの生活になられて、それでも時々会いに行つたのですけれど、不思議だったのは、昔とても能弁で、ともか

くいくらでも話が出てきて、豊かな世界だったのですが、それがどこに行ったのかということ、それが非常に不思議な気がしました。そこに先生がベッドに寝ておられて昔のような話は全然出来ないのです。しかしその先生の言われた世界はあるに違いない、どこに行ったのか。なぜ言葉が出てこないのか。もちろん脳がやられたからだ、と医学的にはすっきり説明がつくのですが、あの先生が持つておられた豊かな世界が今どうなっているのかという疑問、ベッドに寝ておられるのを見ながら不思議だ不思議だと思いました。残念というのもありましたが。元気な頃と比べてあまりにも落差が大きいです、これは何かな、という納得いかない状態がずっとあったのです。なぜこんな所に寝ておられて黙っておられるのかなと。

奥嶋 今でもその教えは残っていますか？

早川 ああ、それはもちろん、声は録音してあるので、いつでも聞くことが出来るので、元気な時の様子が出てくるのですが、実際に倒れて寝ておられる時が変な気がしました。亡くなられて、むしろ、何か始まったという感じがしました。

参加者B 三人の師匠と言われましたが、福岡先生と仏国寺のお師匠さんとそれからもう一人はどなたなのですか。

奥嶋 和田重正という方です。私が自然農園という所にいた時、和田先生と縁のある方が来ておられて、その方が和田先生の本を持ってきておられたのです。『葦かびの萌えいずることく』というのがあって私読んだのです。その先生は小田原におられたので、一度二度お訪ねした

のですね。

福岡先生も和田先生も私の師匠も、いわゆる自覚者ですね、自覚者、自分自身気が付かれた方です。ですから、福岡先生もそうですし和田先生もそうですが、和田先生の本なんかも読むと全然違うのです。ただの評論の本ではない。教育のことに書いて書いてあっても。自分自身の体験から中学生にも分かる程度のやさしい文章で、そして本当の確信というか、それが書かれている。皆様あまりご存じないかも知れませんが。和田先生は亡くなられて残念ですけれど、書かれた本はたくさんあります。みんなすごいです。

私の三人の師、師匠というのは、自分自身の真実に気が付かれた方たちです。みんなそういう体験のある方です。

早川 だいぶ残り時間も少なくなってきました。もうないようですので本日はこれで終了といたします。ありがとうございます。もう一度拍手で感謝の意を表したいと思います(拍手)。

資料

一・参加者(三十名)

伊吹すみ子、植茶英男、岡カネ子、荻原茂男、奥泰子、奥幸治郎、
門野君子、上中きみ子、川添里美、治部ひろみ、田歌登、
田歌道子、谷川明廣、谷川禎子、知原宗隆、坪内彰、坪川博之、

中野岩二郎、中野成美、早川真理子、早川恵子、藤原義信、
向嶋ひろみ、森口和子、森本小夜美、門野幸巳、山本幸子、
他二名

二・発言者

A (四十代、女性)、B (五十代、女性)、C (五十代、男性)、
D (五十代、男性)、E (七十代、女性)